巻頭言

母子の継続ケア

聖隷クリストファー看護大学　藤本　栄子

現在，私は看護大学で母性看護学を担当していますが，臨床は産科病棟，小児ICU，NICUで経験を積みましたので，「母性看護」領域と「小児看護」領域の双方に携わってきました．また，赤ちゃんが好きで助産婦になったようなものですから，意識的に母性看護学の中で低出生体重児やハイリスク新生児の看護を教え，NICU看護実習も母性看護領域で担当してきました．結果的に，学生は成熟新生児の理解に加え，妊娠・分娩を通して褥婦の身体・心理がどのように変化するか，母子関係がどのように変化するかなどを体験的に学んでからNICU看護実習を行うので，健常新生児とハイリスク新生児の看護を一連の繋がりを持って学習できているように思われます．また，症例を通して産科からNICUへ，さらに地域・外来へと必要な情報が有効に伝達され，その情報を生かした看護ケアが提供される事を学んでいます．このように，領域で看護の対象を分けるのではなく，母子のニードに応じて，ケアを提供する側が連携・調整を取りながら継続ケアを行っていくことが，NICU看護では特に求められていると思います．

さて，NICU看護における“継続ケア”の実情を本学会発表から捉えてみると，まず，退院前には退院後の育児を想定した『知識・技術指導』が行なわれており，退院後の『電話訪問』や『電話相談』についても多くの報告がありました．また，平成8年以降は，ハイリスク児対象の子育て支援事業が地域の保健所で開始されたことに伴って，退院後の『地域保健婦との連携』に関する報告が増えていました．さらに，数は少ないのですが，平成9年には産科入院中のお母さん方の状況を，より適確に把握するために，NICU看護婦による『出生前訪問』についての報告があり，平成10年にはNICU看護婦の地域保健婦との『同行訪問』に関する報告，平成12年にはNICU看護婦による『外来での育児相談』と『地域の産科施設への電話連絡』に関する報告がそれぞれありました．これらはNICU看護婦と地域保健婦との連携，産科病棟や小児科外来スタッフとの連携について述べたもので，健常成熟新生児とは異なるニードを持った母子を継続的に支援する取り組みが行なわれていることを示しています．また，昨年のシンポジウムではNICU卒業後の子育て支援に関して，より総合的な継続ケアについて討議されました．

では，このような研究を通して得られた知見を，どのように臨床や地域におけるケアに活かしていけるでしょうか．ケアの継続性には，同一のケア提供者が一貫した関わりを持つ“人の一貫性”とケア提供者は変わってもケア内容が変わらない“ケア内容の一貫性”があると思われます．前者については，NICU看護婦による出生前訪問や同行訪問，外来での育児相談のように，お母さん方との場の共有を通して，領域を超えたケア提供の可能性が示唆されています．後者については，保健・医療・福祉の専門家との有機的なネットワーク作りに加えて，看護者間の有機的なネットワーク作りが必要と考えます．そのために，お互いに顔見知りになることからはじめ（連絡会等），関わった事例のケア検討を通して，役割と責任を明確にしていけたらと思います．今，私のいる静岡県の西部地区ではそのような集まりが始まり，システム化に向けて模索しています．母子のプライバシーに配慮しつつ，どのように情報を共有するか，気がかりな事例をどのように繋いでいくか，お母さん方が必要とされる時に，タイムリーな関わりが持てるにはどうすればよいのか等々，多くの課題を持ちながら，進んでいるところです．